

学 位 論 文 要 旨

氏 名 佐藤臨太郎

題 目 Exploration Into the Effects of Recasts and Self-initiated Self-repair During the Output-based Interactive Activities on Japanese EFL Learners' English Learning.

(アウトプットを伴うインタラクティブな活動におけるリキャストや自己修正の、外国語として英語を学ぶ日本人学習者の英語学習への効果についての検証)

学位論文要旨 (和文2,000字又は英文1,000語程度)

英語教育に生徒の実践的運用能力の向上が求めてられて久しい。しかしながら、状況は変わってきてはいるものの、いまだに、いわゆる文法訳読式の授業が高校(中学)の現場では主流を占め、実際にコミュニケーションを伴う活動の浸透が、一般的に実現しているとは言い難い。特に文法の指導についてはそれが顕著であるといえる。「知識としての文法力」ではなく「使うための文法力」をいかに身につけさせるかが現在の日本の英語教育界において大きな課題であるといえる。この「使うための英文法力」を伸ばす方策として、学習者自身に、意図する意味を自らの文法知識を使って、アウトプットさせることが必要であり、さらにそれに続いて、言語形式に注意を向けさせアウトプットした誤りを修正させるための訂正的フィードバックを与えることが必要であると考えられている。また、学習者が自ら誤りに気づき、修正していくことの重要性も指摘されている。

本研究では、インタクションを伴うアウトプット活動における、訂正的フィードバックの一つである学習者の誤りを教師が正確に言い直した「リキャスト」と、学習者が会話において自分の発話の中に問題点を見だし自分で修正する「自己修正」について、その分析と日本人学習者の英語学習への効果が多角的に検証された。

英語熟達度の低い高校2年生を対象とした授業においては、英語教師がリキャストを効果的に用いていないこと、学習者が教師からのリキャストに気がつかないこと、などの問題点が記録された。中級レベルの高校生とネイティブスピーカーがインタビューテストを行った際に記録されたリキャストの分析・検証においては、生徒が誤りを訂正するアップテイクの機会が与えられない現象(no opportunity)や、生徒がリキャストを承認する現象(acknowledgment)、後に誤りを訂正する現象(later incorporation)、またネイティブスピーカーが自分の個人的な好みでリキャストを与える現象が記録され、それらを考慮した上で測られたリキャストの効果は先行研究での結果より比較的高いものであることが分かった。またエラーのタイプ、リキャストと生徒の元の発話の相違箇所数、リキャストの長さの観点からもリキャストの効果が測られ、その結果、エラーのタイプでは、日本語の使用、語彙、発音、文法の順に効果が見られ、リキャストにおいて生徒の発話との相違箇所数が少ないほど、効果的に働き、リキャストの長さについては、短いリキャストがアップテイクを促進するという結果が得られた。さらに、リキャストは明示的な訂正的フィードバックに比べ会話の流れを妨げない傾向にあるということが示唆された。比較的熟達度の高い大学生3名を対象に刺激想起インタビューを用いて、気づきと修正の関係、気づきとリキャストのタイプの関係を調べた結果においては、気づきと修正の間には有意な相関があること、与えられたリキャストの種類により気づきに違いがあることが確認された。

別記様式第3号

ライティング指導におけるリキャスト使用の可能性を調べていくという観点から、大学生のエッセイの書き直しにおけるリキャストの効果についても検証された。25名の大学生のリキャストを参照して書き直しされたエッセイを量的・質的に分析した結果、リキャストの長さや、元々の間違いからの変更点の数、誤りの種類等に関わらず、学習者は比較的高い割合で自らの誤りに気づき、修正に生かしていたことが判明し、また、書き直されたエッセイは正確さ、複雑さ、流暢さの観点からも分析され、全てにおいての向上が確認された。

自己修正については、英語熟達度の低い高校2年生を対象として調べた結果、期待されたほどの頻度では発生しなかったことが確認された。原因としては、文法事項が内在化されたかたちで習得されていなければ、誤りに気づき、さらに修正していくことは難しいことが第一にあげられ、また内容に注意を払っているコミュニケーション活動においては、形式にも注意を向ける事が難しいということが述べられた。さらに、対話している相手が自分の発話を理解できないときに誤りに気付くことが先行研究では明らかになっているのに対して、本研究では学習者が、発話を理解していなくても理解したふりをするという現象が多くみられたことが報告された。中級レベルの高校生英語学習者のネイティブスピーカーとの1対1会話における自己修正現象についての分析においては、自己修正は比較的高い成功率を示したが、語彙の誤りにおける成功率が最も低いことが判明した。また文法の誤りへの修正の失敗する理由として、文法事項が内在化されたかたちで習得されていなければ、誤りに気づき、さらに修正していくことは難しいということが記録された対話の質的分析結果から示唆された。